川上奨学金報告

論文タイトル

「ゲストハウスオーナーの思想からみるゲストハウスという宿泊の形」

調査概要と研究結果

近年、ゲストハウスという宿泊施設が日本国内で急増している。ホテルや旅館に並び、多くの人々に、外出先での宿泊の際の選択肢として選ばれるようになった。

そもそもゲストハウスとは、素泊まりを基本として、他人と部屋や水回りの施設を共有することで、低価格で宿泊することができる宿泊施設のことを指す。「共有空間」や「交流を目的とした共有スペース」があるのが特徴だ。

本論文では、ゲストハウスオーナーとゲストハウスの関係性や、ゲストハウスの未来についてを明らかにするために、日本各地のゲストハウスの違いはどこから生じているのか、そしてゲストハウスという宿泊の形は今後どうなっていくのかという 2 つの問いを立て、これらを明らかにするためにゲストハウスオーナーへのインタヴュー調査を行った。

まず、第 1 章では、ゲストハウスの概要と交流に関する研究を 2 つに分けてまとめた。概要に関する研究では、1990 年代以降のゲストハウスは、現在のように多くの人々の交流や情報交換の場を指す場となったことや、2015 年 8 月末時点で、全国にゲストハウスは 522 軒あることなどが分かった。交流に関する研究では、ゲストハウスでの交流の状況はゲストハウスの立地、オーナーの特性、食事携帯によってさまざまであり、現状では、宿泊者と地域の人々との交流を積極的に行っているゲストハウスは少ないことなどが示された。

第 2 章では、調査方法について論述した。調査対象者を選出する際、日本各地のゲストハウスを分類し、それぞれの類型に当てはまると思われるゲストハウスを選び、経営者であるゲストハウスオーナーへインタヴュー調査を行った。本論文では、日本各地のゲストハウスを、テーマパーク隣接型・世界遺産型・首都型・観光地型・郊外型の 5 つに類型し、インタヴュー調査を実施した。

第 3 章では、インタヴュー調査の結果を論述した。本論文では、ゲストハウスオーナーとゲストハウスの関係性を、過去の旅行体験という切り口から探ったが、ゲストハウスオーナーの過去の旅行体験は人によって様々であり、それらの体験は、現在のゲストハウスの経営にはあまり反映されておらず、自分らしさや、オリジナリティ、独自性を出したい

という声が多いことが分かった。また、ゲストハウスという宿泊施設は、年々増加し、現在は飽和状態となっていることや、今後都心では、多くの訪日外国人観光客をも受け入れるような大型のホテル化したゲストハウスが生き残り、個人オーナーが経営する小さなゲストハウスはコストのかからない地方に増えるのではないかと予測されていることが見て取れた。

第 4 章では、本論文の問いに対する答えを論じた。1 つ目の問いである、日本各地のゲストハウスの違いはどこから生じているのかという点については、ゲストハウスオーナーの独自性に起因していることが分かった。2 つ目の問いである、ゲストハウスという宿泊の形は今後どうなっていくのかという点については、都心のゲストハウスはホテル化し、個人オーナーが経営するゲストハウスは地方で生き残る方向に進んでいるのではないかと考えられた。また、ゲストハウスという宿泊の形の今後を宿泊者の変化から論じると、かつては、他者との交流や新しい出会いを求めてゲストハウスにくるバックパッカーがゲストハウスの宿泊者には多かったが、現在の宿泊者は、キャリーケースをもって宿泊費を安く抑えようとして宿泊しに来る人に代わってきた。そのため今後のゲストハウスは、自分以外の人と出会い、交流することを通じて、新しい価値観を知ることができる場所ではなく、安く宿泊するためだけの施設になってしまう可能性もあるのではないかと考える。しかし、ゲストハウスに訪れるすべての宿泊者がこう考えているわけではなく、人との交流や新しい出会いを求めてゲストハウスを利用する宿泊者もまだまだ多くいることは事実だ。今後もゲストハウスは、宿泊することで他者との交流や新しい出会いがあり、新しい価値観を知ることができる場所であってほしいと考える。